

〈本文〉

七番

左 勝 鴨

鈴鴨の声ふり渡る月寒し

嵐雪

右

鴨くはて菜を干枯す塩屋かな

魚児

すゝかもの声ふりたつる秀句かきり

なし。一句やすらかにして厳寒の気

しき尽たり。彼妹かりの哥を

吟すれば六月廿四日の日も寒しと

云けむ、さる事にや。右の句も

蚕を飼ふものゝきぬきぬためし

もあはれに侍れとも、すゝかものすゝ

の声、句調たかしとやいはん。

〈現代語訳〉

左 勝 鴨

冬の夜空を鳴きながら鈴鴨が渡ってゆく。同じように渡る月の何と寒々しいことよ。

- * 「鴨」は冬の季題。和歌では『万葉集』以来、上毛、うき寝やその羽音、鳴き声などが読まれている。俳諧では、鴨鍋・鴨の汁など、食材としての詠み方が目立つようになるが、嵐雪句では、和歌以来の鳴く鴨を詠んでいる。「鈴鴨」は和歌の作例が少ないが、貞門俳諧ではよく詠まれる題材。鳴きながら飛ぶことを、「鈴」の縁で「ふり渡る」とした。また、「渡る」は「月」にもかかる。縁語、掛詞仕立てではあるが、奇をてらった技巧ではなく、金属的な鈴の音と、寒々とした冬の月との調和がとれた感覚的な句となっている。諸注、解釈に大きな違いはない。

右

捕った鴨を食べることもせず、軒に干した菜も枯らしてしまった塩屋だなあ。

- * 食材の「鴨」というのは俳諧では一般的ならえ方だが、あえて「鴨くはで」とひねったところがポイントである。鴨は自分たちが食べるためではなく、売って生活の足しにするために捕ったのであるう。「塩屋」は歌ことばで、海水を煮詰めて塩を作る小屋をいう。海人の貧しく辛い生活を象徴する言葉である。

そこに、

さすらへの宿に干菜も見苦しや 長頭丸(『紅梅千句』第四)

などの例があるように、干し菜という貧しく、俳諧的な食材を加えた。しかも、その干し菜が枯れている点が、この海人の生活の辛さを感じさせる。なお、「菜を干す」は冬の季語で、「鴨」にあわせて冬らしい景色になっている。「干枯す」は、干して乾かすのか、干し枯らしてしまうのか、意見が分かれたが、ここでは枯れてしまっている景ととりたいたい。なお、新日本古典文学大系『続の原』(『元禄俳諧集』)の解釈は「鴨を獲つても金に換えて食うこともない海人の塩屋では、軒下に副食にする掛菜が干してかわさかされている」といい、校本芭蕉全集(俳論篇)も同様。

また、「塩屋」なのに菜も鴨も塩漬けにしない、の滑稽もあるか。

〈判詞〉

鈴鴨が声を張り上げて鳴く、とは大変すぐれた句だ。一句は、なだらかで深い趣があり、厳寒の情趣が十分に尽くされている。あの「妹がりの歌」を吟ずれば、猛暑の六月二十四日も寒く感じられると言うが、そのような事であろうか。右の句も、蚕を飼う者は絹織物を着ないという例も思われて哀れではあるが、鈴鴨の鈴の声の方が、句の調子が優れている、といえるだろう。

* 「秀句」は優れた句のこと。芭蕉は『十八番発句合』の判詞において、貞室の「是はく」と計花の吉野山」を「秀句」と評している。「やすらか」は和歌において、趣向を求めず、平淡な調べの中に深みのある詠風を賞する言葉として用いられる。嵐雪句の穏やかな表現を賞したもの。「妹がりの哥」は『拾遺集』巻四の紀貫之の歌を指す。ともに冬夜の鳥の声を詠んだものだが、この箇所は以下の『無名抄』の記述を踏まえる。

(俊恵) 又云、

思ひかね妹がり行けば冬の夜の川風寒み千鳥鳴くなり

この哥ばかり面影ある類はなし。六月廿六日寛算が日も、是を詠ずれば寒くなるとぞ或人は申し侍し。大かた、優なる心・詞なれど、態求めたるやうに見ゆるは、歌にとりて失とすべし。結ばぬ岑の抄、染めぬ野辺の草葉に、春秋につけて花の色くを現すごとく、自ら寄り来ることを安らかにいへるが秀哥にては侍る也。

(日本古典文学大系『歌論集』)

「寛算」は平安中期の比叡山の僧で、死後悪霊となつて三条院はじめ天皇家を崇つて悩ませたという。なお、芭蕉の判詞の「秀句」「やすらかにして」という評も、この『無名抄』の引用箇所「安らかにいへるが秀歌」とあるのを意識したか。また、右句の評「蚕を飼ふものきぬきぬためし」云々は、次の「蚕

婦」〔古文真宝前集〕無名氏)による。

昨日到_ル城郭_ニ 帰来_{レバ} 涙満_ツ巾_ニ 遍身_ノ綺羅_ノ者_ハ 不_ス是_レ養_フ 蠶人_ニ

(寛文五年刊『鼈頭評註古文真宝前集』)

「蚕婦」は、蚕を飼う者の貧しい暮らしを歌ったものだが、魚兒自身がこの詩句を意識していたかどうかは不明。和漢の典拠を左右の判詞に使用し、最後は嵐雪句を「鈴」の縁で「句調高し」と評して勝ちとした。